

発行責任者:保坂 義秀 (アーキ福音ミニストリー代表、聖書キリスト教会長老)

発行所:アーキ福音出版 285-0923 千葉県印旛郡酒々井町東酒々井 3-3-34

TEL043-496-2727 Fax043-496-2729 E-mail : ark-plan@cameo.plala.or.jp

ホームページ URL: <http://ark-fukuin.com/>

ゆうちょ銀行
記号 10560 番号 29284321
アーキ福音ミニストリー

特集

創世記一章一節をはじめとする創造の解釈

— 神による創造行為を中心に —

CRJ 顧問 野口 誠(牧師)

一、序

「はじめに神は天と地とを創造された」(創世記1・1)をはじめとする神による創造行為そのものに焦点を絞って考察するのが、この試論の目的である。

二、神による創造の方法

神は、被造物をどのような手段で創造したか、その問題を解くかぎは、創世記1・3にある。それは「神は『光があれ』と言われた。すると光があった」である。

この聖句から神は、「自身のことばで光を創造したことになる。つまり、創造の対象は、光であるが、それをどのようにして創造したか、その方法は、自身のことばによったことである。

三、解決しなければならぬ問題

神は、「何々があれ」と自身のことばで命じることによって命じられたことが実現したのである(創世記1・3〜)。

第一の命令のことは、「光があれ」(1・3)である。

第二の命令のことは、「大空(大気)があれ」(1・6)である。

第三の命令のことは、「分離」という作用(があれ)(1・6)である。

第一の命令の結果は、「光があった」[「ハヤー」](1・3)である。

第二の命令の結果は、「神は大空を造った」[「アーサー」](1・7)である。

第三の命令の結果は、「神が(水を分離した)「バートル」」である。

ここで、ある解釈者は、大空については「神は造った」とあるが、光については、「神は造った」とはなく「光があった」とあるから、その光は造られたのではなく、すでにあった光(神やキリストの栄光[Shekinah後光])であるという。またある解釈者は、その光は太陽の光であるという。

ここで問題は、「何々があった」が既存のものの出現とすれば、「何々があれ」という命令も既存のものの出現の命令とどうなるか。そうすると

「大空があれ」は既存の大空の出現を命じたことになる。ところが、神は冠詞の付いていない不特定の「大空」が存在するように命じている。その結果として「神は、(大空が)存在するように命じた」「その大空を造った」(1・7)とある。「神が(その)大空を造った」とあるからには、その大空は、既存のものではなく無からの創造と解するのが自然である。「造る」[「アーサー」]は「創造する」[「バーラー」]と同じ意味で使われる(創世記1・26「人を造ろう」)。「アーサー」と「バーラー」は「神は人を創造された」[「バーラー」]参照)。

光のほうは、「光があった」とあり、大空のほうは「神がその大空を造った」とあるのは、表現の単調さをさけるためである。旧約聖書では、ある特定のことは強調するばあいは、同じことばを反復するが、一般には同じことばを使わないで、同意語を使うのがふつうである。

したがって神が「光があれ」と命じたのは、光が無から存在するように命じたのである。その結果、「光があった」のであるから、神の命令とその結果とを合わせて「神は光を創造した」と言い換えることが可能なのである。

神が光を造ったことは、「わたしは光を形造る(ヤーツアル)者としてやみを創造する(バーラー)者」(イザヤ書四五・7)から論証できる。

「形造る(ヤーツアル)」は、エリミヤ書では「創造する(バーラー)」「の意味で使われている。」(彼(主)は万物の造り主(ヤーツアル)である」「(エリミヤ書一〇・16、五一・19)。
聖書で同意語(類語)を使う例を新改訳(3版)を用いて紹介する。

「わたしは光を造り出し(ヤーツアル)、
やみを創造し(バーラー)、
平和をつくり(アーサー)、
わざわいを創造する(バーラー)。
わたしは主、これらすべてを造る(アーサー)者。」(イザヤ書四五・7)
天を創造した(バーラー)方、すなわち神、地を形造り(ヤーツアル)、これを仕上げた(アーサー)方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造(バーラー)せず、人の住みかにこれを形造った(ヤーツアル)方、まことに、この主がこう仰せられる。「わたしは主である。ほかにはいない。」(イザヤ書四五・18)。

同意語には、それぞれ他とは微妙な差異があることは言うまでもない。したがって箇所によってはそれが生かされている所もある。たとえば、創世記一・1では神は地を「創造した(バーラー)」のであるから、イザヤ書四・18でこれを茫漠としたものに創造(バーラー)せず、人の住みかにこれを「創造した(バーラー)」といってもよさそうであるが、「人の住みか」が目標であるから「形造った(ヤーツアル)」とある。

さらに創世記一・3の光が無から創造された光である証拠は七つある。

(一)神の命令による創造
神が、「光があれば」と「言われた」ことは神が、光というものが存在するように命じたことである。詩篇一四八・5に「主が命じた。するとそれらが創造された」とある。これから推して創世記一・3の光は、それまで存在していなかった光が存在するようにとの命令で、光が創造されたところのが自然である。

(二)無冠詞は既存の光でない証拠
すでに存在している光を呼び出す

ならば、「かわいた所(ヘブル語では冠詞つき)が現れよ」(創世記一・9)のように冠詞がついているはずである。しかし、実際にはついていない。

(三)既存のものを呼び出す表現は「現れよ」
既存の神の栄光の光や太陽の光を呼び出すならば、「何々があれ(イエヒエ)」「ではなくて、「何々が現れよ(イエラエ)」となるはずである。参考になるのは(創世記一・9)である。

(四)神による点検の対象は被造物
創世記一・4で光が点検されていることは、その光が神によって一日目に創造された証拠である。神の属性である既存の栄光の光が神「自身」によって点検されるのはきわめて不自然である。それゆえ、この光は神に創造された光と解するのが自然である。

(五)神と御子のシエキナー(栄光)の光はやみと並存しないはず(ヨハネの黙示録二一・22〜23)である。
神と小羊の栄光の光があるところにはやみはないはずである。しかし一日目に薄暗い朝と夕があったことは暗やみと栄光の光が共存したことに

なる。

全能なる創造の神が、風のために光を造れず、自分の栄光の光を風のために仮に用いるほど貧弱な神なのだろうか。しかも全能の創造者なる神が、「自分の栄光の光の一部を」風と名づけた」と解することは、問題である。その理由は、聖書は、神が一日目に光を創造し(創世記一・3)、さらに神が光とやみとを造った(イザヤ書四五・7)(ここを主張しているからである)。

「創造主訳聖書」の訳には、「創造主が一声、『光は、出て来い』と仰せられると、光が出て来た」(創世記一・3)とある。この訳は、既存の光を前提とした意識であってヘブル語原典に即した訳ではない。

(六)太陽の光説

「種類に従って」B・C・ネルソン著、山岸訳の付録(五)「創世記一章から」の中に「神が『光があれば。』と仰せになった時から最初の一日が始まりました。この日に神が光を創造されたではありません。光も「初めに」創造されてあったのです。ですから、この時以前から太陽は地球に向けて光と熱を発していました。しかし、地球を覆っていた厚い黒雲のために光

四、神の「ことば」による創造

は地球の表に到達していませんでした。神はこの日から地球上に光が届くようにされたのです」とある。

著者は、神が「光があれ。」といわれた時から一日が始まったといわれるが、聖書には「主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造った」(出エジプト記二〇・11)とあるから、創世記の一・1から一日にはいるはずである。氏は、太陽も光も「初めに」創造されていたという。そのことは聖書に根拠はない。聖書では光は第一日目(創世記一・3)、太陽(大きい光るもの)は第四目目に造られている(創世記一・17)。

(七)パウロ、言い換えれば新約聖書の見解
パウロは、その手紙(コリント人への手紙第二の四・6)で「光があれ」(創世記一・3)を「やみの中から光ががやけ」と意訳している。パウロはやみを「通じて」(コリント)ではなく光のない『やみの中から』(エフ)光ががやけ』と言われた神」としてゐる。パウロの訳からすれば、創世記一・3の光は、既存の光ではなく神によって無から創造された光であると解するのが自然である。

神による無からの創造は、人間による製作(メイク)とはまったく異なるので科学的に理性で理解しようとしても無理である。

神のことばである聖書は何といっているか。まず「信仰によつて」(入)フル人への手紙十一・3)と語り出す。そして宇宙創造については目撃者はいないので特定な人物には言及しないので「私たち」は理解する(分かる)「とある。「この宇宙(トウース・アイオナス)」とは空間的な面だけでなく時間的な面も意味する複数形の語である。この宇宙は、宇宙空間その中にあるすべてのもの(物質的・霊的実在(天使を含む))を意味すると解せる。

この宇宙(的世界)が「神のことば」(一)マ二語られることば」(一)によって造られた(カタルティソーニ完成することば)である。この問題は、神の「ことば」(一)「マ二語られることば」(一)「マ」(の基本的な意味は、語られることば)である。それ(一)「マ」は、話し手の内にある思想の表現としてのことばである。

ここで宇宙がつくられたところの

神によって発せられたことば(一)「マ」で連想するのは、創世記一章の中で八つの各節が毎回、「神は言われた」という同じ表現を反復して神のことばによる創造と神による被造物の出現を表現している。

1. 光(一・3) 一日目
2. 大空(一・6) 二日目
3. 陸地と海(一・9) 三日目
4. 植物(一・11) 三日目
5. 発光体(一・14) 四日目
6. 魚と鳥(一・20) 五日目
7. 動物(一・24) 六日目
8. 人間(一・26) 六日目

神は、創造も操作もみことばによって行われた。創造については、人間以外は、すべて造られるものが主語になって神のことばによって造られるか、地や水が主語になって、しかるべきものを生み出すように神に命じられている。

しかし人間だけは、神が主語になって「われわれは、われわれにかたどり、われわれに似せて人を造ろう」として(その他の生きものを)支配させよう(創世記一・26)と三位一体のうちでの相談の上で決断し実行されている。神の創造と操作は、「神は言

われた」(創世記一・3、6、9、11、14、20、24、26、28、29)という神の発言に基づいている。

次の三つの聖句は、神のことばによる創造を述べたものである。

「主のことばによつて天は造られた(アーサー)。そして天の万象(太陽、月、星々」申命記四・19)もすべて主の口の息によつて造られた(アーサー)」(詩篇三三・9)。

「これらのもの(み使いたち、太陽、月、星々、天上の水)に主のみ名をさへびさせよ。なぜなら主が命じられると、それらは創造された(ハーラー)からである。」(詩一四八・5)

「信仰によつて私たちは、この宇宙が神のことば」(一)「マ」語られることば」(一)によつて造られた(カタルティソーニ完成することば)が分かるのである」(入)フル人への手紙一・3)。

五、神の「ことば」は今も生きて

創世記一章における神のことばによる創造と操作は過去のできごとであるが、今もわたしたち生ける者は、

神のことばによって生かされているのである。

四十日四十夜、断食をし、空腹であるあなたが神の子であるなら、これらの石をパンになるように命じて「うらななさい」(マタイの福音書四・3)といわれた。悪魔は、神がことばで命じてことをなすことを知っているようである。また主イエスは石をパンにすることができないので、空腹な主イエスにとっては大きな誘惑であると悪魔は思ったはずである。

主イエスは、悪魔のことばにたいして神のことばである聖書(申命記八・3)を引用して『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一一切の言で生きぬものである』と書いてある「と」によって悪魔を撃退された。

地球の回転(マタイの福音書五・45参照)も太陽の光も熱も、大気も水も、食物となる穀物も野菜も動物も魚もすべて神の口から出る一一切のことばに力をつけている。提供はなれているのである。

人が必要である。パンの材料として小麦粉と水、調理するための熱が必要である。これらは、すべて神のことばによって提供されるものである。また人はパンを食べても空気を吸わなくては生きられない。

よく考えると、人が肉体的に生きるためには、パンだけではなく、地球の引力をはじめ、大気や太陽の光や熱のみならず、人体の機能(たとえば心臓を絶えず動かしている自動能)もすべて神のことばによって造られ、神のことばによって支えられていることを知るのである。

六、創世記一章一節の解説

ヘブル語の聖書の創世記一章一節の最初のことばは、「バシシ」と「はじめ」で、これをヘブル語の辞典で引いても出てこない。その理由は、「バシ」という「何々に」という英語の「イン」にあたる前置詞と「シ」と「はじめ」という名詞からなる副詞句だからである。この「はじめ」の中に時間の創造が含まれていると解釈できる。

その次にある単語は「バラー」(彼は「創造した」という主語が三人称・男性・単数で動詞が完了形である

。ヘブル語の完了は、事が完了しているという意味である。

ヘブル語には、英語のように過去・現在・未来のような時制はない。事が完了しているという「完了」と、事がまだ完了していないという「未完」しかない。したがって、過去の完了か、現在の完了か、未来の完了か、文脈によって判断するのである。したがって創世記一・一のばあいは、「はじめ」があるから過去の完了であると判断するのである。

その次にある単語は、「エロヒム」という単語で、これは単数の神「エロアハ」の複数形である。ところが、その動詞「バラー」は、主語が単数のばあいに使用される形である。そしてこの複数形は、よく威厳を表すといわれるが、そうであれば、動詞も複数にしてよさそうである。しかし英語に王さまが、自分自身を *monarch* (複数と単数) で表す例もあるから、そのようにとれなくもないが、それよりもむしろ旧約聖書に、新約聖書の三位一体性の予表があると解したほうがよいと思われる。創世記一・一に「神」ということばがあり、一・二に「聖霊」にあたる「神の霊」があり、一・三にはヨハネの福音書一・三にある「この方(彼)

創造者としてのことば(ロゴス)キリスト」にあたる神による創造の発言「そして神は言った」がある。

その次に「何々を」にあたる「エト」がある。その次に「ハ」という定冠詞があり、その次に複数形「シャマイム」(天)がある。その単数形が「シャマイ」である。この単数の形のために複数にする上では双数形(両手、両足、両目など)になる。文脈から見てもここでは複数形にころのが自然である。

この天の複数形は、大気圏と天体のある無限の宇宙空間と神の御座があり、復活の主と聖霊(ヨハネの黙示録二二・17、ヨハネの福音書一四・2)と聖徒たちと御使いたちのいる第三の天(コリント人への手紙第二の一・二・2)と思われる。これらが造られたとき空間を占める「やみ」(イザヤ書四五・7)が創造されたと思われる。「天」の次に「と」にあたる接続詞「ウエ」がある。その次にまた「何々を」にあたる「エト」がある。その次に定冠詞「ハ」があり、その次に単数の「地」「エツ」がある。冠詞がつくと「ハアツ」という発音になる。そしてこの地に水は含まれると思われ。

天と地とそれぞれの前に、日本語の助詞にあたる「ト」(ハブル語では前置詞)(何々を)がついていることは、神による創造行為の目的語を明確にするねらいがあるので、画者を訳すばあいに軽く「天地」と片付けないで、「その天とその地とを」くらいに強調すべきである。

[1:1] ベ・レシーと バーラー エロヒーム
 に・はじめ (彼は)創造した 神(複数)
 エと ハ・シャマイム ウェ・エと ハ・アーレツ
 ~を その・天(複数) と ~を その地

[1:2] ウェ・ハ・アーレツ ハイター
 そして その地は ~であった
 トフー ワ・ヴォフー
 無 そして 無

ヘブル語発音を表すために字体を混用しています

【試訳】
 「はじめに神は天と地とを創造された。そしてその地にはなんにもなかった。」

創世記一章一節は表題でも神によ

る創造の総括でもない。それは創造の六日間の一日目のはじめである(出エジプト記二〇・一一)。そして一節は接続詞「ウエ」によって二節につながって二節から人のすみかを中心に(イザヤ書四五・一八)話が継続するのである。

「神が天地を創造したはじめに」という訳し方があるが、二節の前に接続詞があるので、それは不可能である。一節は「そしてその地は」と次節に連続するのである。

【まとめ】
 神の創造と真つ向から対立する概念は盲目的偶然による進化論である。神による創造は、神が中心であるために自然科学の限界のゆえにその研究対象にはなり得ない。あくまでも聖書が中心になることは言つまでもない。聖書に基づく創造は、神の行為であり、生物でも無生物でも、神は、はじめから完成したものとして造る。とくに生物のばあいはそうである。たとえば、神は生物を、はじめから成熟したものとして造るのである。そして、その後も摂理的に保護保持する。

その創造の方法は神「自身のことば」によって造るのである。神の創造は

創世記一章の創造の六日間に完了し、そのあとは、被造物は神によって摂理的に保持されている。人間のばあいは創造の六日目に造られ、アダムとエバからノアの8人の家族をとおして今日に至っている。太陽のばあいは創造の四日目に造られて今日に至っている。

この試論の目的は、神による創造の手段であって、それは、神は「自身のことば」によってすべてのものを創造されたというところである。要するに創世記に示されている神の創造の手段は神のみことばによるということである。



神のみちびきにより

—私の信仰履歴・十九—

植草 榮一 牧師

「天の下には、何事にも時期があり、すべての営みには時がある」

伝道者の書三章一節

前回の18回から話は少し飛びが1994年1月13日より16日までの三日間、東京ドームに於いて行われた「ヒリー・グラハム東京国際大会」についての記憶を書いておきたい。

私たちの集會も、近隣の教会と共に協賛教会として参加していた。この行事に参加できたのは、この大会の会計責任者であったS兄のおかげである。その当時、聖書配布の日本国際キヤノン協会の全国会長をしていた彼が骨をおってくれたのである。

日本で有名な伝道者の本多弘慈師や羽鳥明師と一緒に、大会では中央の講壇におられた人である。彼に勧められて、四日間の大会期間中に、私たちの集會からもほぼ全員が都合の良い日に出席した。私は勤めが終わってから出席して、最終日の日曜日には家族揃って参加した。

これより14年前の1980年、後樂園球場で行われたヒリー・グラハム博士の二度目の来日の大会には、集會としてではなく、私たち家族だけの参加であったことを思うと、感無量の思いがした。

それでも、1994年1月のこの時の大会では、東京ドーム一杯の観衆と有名なゲスト歌手の賛美、博士の分かりやすいメッセージなど、参加したときにはそれなりに意味があった。多くの人々が招きに応じてグラウンドに降りて行き、奉仕者にお祈りして貰っていたし、集會の人たちも同じようにグラ

ンドに降りて祈ったり祈られたりして祝福を頂いた。傍観ではなく、自分たちも行動して参加したことに大きな感動と興奮を抱いた帰り道、思いがけない出来事に出会った。

帰途についた大勢の人の波が水道橋の駅に進む道で、私は一人の女性からパンフレットを手渡されたのである。その人は誰彼と手渡すのではなく、明らかに私に向かって来たと思われる。

帰りの電車の中で読んでみると、それはJ・T・J宣教神学校の学校案内であった。その女性は神学校の事務職員だったことが後で分かった。その神学校は、私が以前から日々の心の糧として読んでいた小冊子「アパ・ルーム」の巻末に広告が出ていて存在は知っていたのだが、学びたいと言う気持ちはある。今はその時ではないと、自分に言い聞かせて忘れられるようにしていたのである。

相変わらず仕事は忙しく気持ちに余裕がなかった。しかし、神は忘れておられなかった。この年の3月にゲストとして招いたE牧師は、その「アパ・ルーム」の編集者で日本語版の翻訳者であった。J・T・J宣教神学校についてはかなり詳しく、「ここにかく

度見に行きなさい」と勧められた。

しばらくして、「見に行くだけ」と軽い気持ちで聴講に出掛けた。教室は近く引越す予定という事だった。授業を見学、事務員から内容の説明を受けて気持ちは動いたが、しかし、問題が大きかった。学費の事である。その解決がなければ、とても入学する事は出来ない。大きな祈りの課題が与えられた。祈りながら色々な方向性を考えるうち、一つの解決が与えられた。

教室生ではなく、働きながら通信生として学ぶこと、学費は分割して支払うことである。家計に負担をかけるので家族にはすまないことだったが、今から二十二年前の当時、こういう方法でも現役サラリーマンであるクリスチャンが神学校で学べるというのは、画期的なことではなかっただろうか。

ともあれ私はこうして新しく二足目のワラジを履き、働きながら「信徒伝道者科」での学びを始めることになったのである。1964年4月の事であった。

(続く)



モバイル・J・カフェ五周年 大家 典子(教会奉仕者)

はこぶね五八号で私が従事しているモバイル・J・カフェについて詳しく書かせていただきましたが、この新しい奉仕が立ち上げられてから九月二四日でちょうど五年になります。

二〇一一年、東日本大震災の年に教会のリーダー的存在のH姉妹が以前神から与えられたビジョンによって始まった奉仕で、彼女とともに現実化させるために、約四カ月かけて準備しオープンに至りました。その日の喜びを覚えています。オープンまで、決してスムーズに進んだわけではなく、いくつか障害物が現れましたが、それらは少しも苦勞になりませんでした。それは、愛するH姉妹とだったからです。(もちろん聖書のことばに立っていただけですが)。

彼女は、愛にあふれ謙虚で信仰の人で、その彼女とともにこれから一緒に奉仕できるということに希望しかありませんでした。しかし彼女は、オープンまで準備をするのが役割だったのです。彼女の夫が三郷の牧師に任命されて、すぐに三郷に引っ越していきましました。彼女も私もまったく想像もし

ないことでした。そして残された私がリーダーになったのです。

これもまったく想像していなかったことです。こんなふうに想像もしなかった事がこの五年の間にも次から次と起こりました。私のプランにはないことが次々と起こるので、これに対応しなければと考えるようになりました。起こったときに慌てないで、心の平安を保ち、冷静に判断したかったです。

カフェを運営していく上において、カフェのスタッフは、最も大切な存在です。このスタッフたちも、すばらしい賜物を持ったスタッフがいろいろな理由で突然辞めたりお休みに入ることになるケースが多々ありました。あるスタッフたちは、転勤、勉強、奉仕のために海外へ旅立ち、またあるスタッフたちは出産、母の介護、仕事のために奉仕が継続できなくなり、その度にリーダーとしては、とても残念な気持ちになります。特に非常に熱心で意欲のあるスタッフが短期間で突然辞めてしまうことは大きな痛手で、正直、心の中で「えー！」と叫びながらも、主の御心なのだから喜んで送り出したいと、相手が困らないように話しをしました。

そこでこのような動揺から解放されるために、私自身がもっと主と同じ目線で聖書的な観点から、突然におき様々な動きを見るようにしようと考えました。各々のために主が決められたプランがあつて起こっていることで、それが彼や彼女のために一番良いことであるのだから、自分の感情を手放そうと決めたのです。

すると私自身の心を平安が支配するようになり、かなり楽になりました。「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。」伝道者の書3・1

精神的にはスタッフたちに必要以上に頼らないように気をつけ、いつも主に頼る姿勢を維持しよう。そして自分の考えや感情に固執しないようにし、聖霊の流れ、支配に任せようと思ひました。しかし頭で分かっているものを実際に行なえるようになるには、訓練が必要です。祈りが必要です。幸い、多くの祈りに支えられているので、ほんとうに感謝です。しかしもっと私自身が神の前に静まり、主との時間を持つことが大切だと思ひました。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ。・・・」詩篇46・10 口語訳

いつも正しい判断を主から聞いて行動するようにならないと、ちよつとした軽率な自分の判断から大きな悪い結果を招いてしまう。注意しなければならぬと失敗して知りました。

またリーダーは、忍耐が絶対必要です。どんなときも怒るのに遅くですね。「主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられる。」詩篇145・8

何回も同じ失敗をしたり、忘れたりがあつてもじつと耐えました。怒ることは簡単ですが、本人は、十分知っているはずだからです。今分からなくても、やがて自分がしていることを、主が論ずるときが来ます。その方がはるかに良いと、経験から分かつてきました。愛は忍耐ですね。

また私の心の中で、ずっと継続することになり重きを置いていました。奉仕の結果は、すぐに現れるものではないので継続しなければいけない。しかしそれが苦痛や重荷ではなく、毎回心新しくされて、主から新しい力を得てやらなければ続かないだろうと思ひました。その気持ちは今も変わりません。私が、ここでリーダーのための心得のようなものを書くのはおこがましいのですが、この五年間を振り返り、

主から学んだなあと確信できることは、いくら何でも分かち合えたらと思ひます。

五周年を機に、プチリニューアルをしようとして、今スタッフたちと計画中です。これからこの奉仕がどのような方向に進むのか、どのような新しいプランが用意されているのか正直わかりませんが、すべて主に信頼し、主に力フエの舵取りを委ねて運営して行こうと思ひます。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」詩篇37・5

夢

今中和人(創造論伝道者・
埼玉医大准教授)



群衆の中で私は黒くて力ある者に向かつて必死に叫んでいる。

「心臓の弁はこの条件も、その条件も、あの要因も全部揃っていないと機能しないんだ！弁が形成されるためには、こんな特殊な条件が全部必要だ！それにも出口にも入口にも弁がな

ければ意味がない！

人間は進化により現在の姿になった、なんて出鱈目を言うな！それに卵円孔というものがなかったら・・・」

群衆は私を罵倒している。

「バカじゃないの？」「進化に決まってんだろ！」「神様なんて寝言を言っつてんじゃねえよ！」

「黙れろ！」「うるせえ！」といった理屈も何も無い罵声もあれば、

「私の研究によれば、動物Aと動物Bとの遺伝子相性は97%を超えていて、これは両者のルーツが共通である可能性が極めて高く、つまり進化を・・・」といった、まじめな学者の声もする。賛成の声があまり聞こえない。数から言えばどう見ても劣勢だ。それでも怯まず私は叫び続ける。

「動物同士を比較する手法はセン又がないよ！遺伝子なんて、前後の遺伝子も染色体も全然違ってても、配列だけが同じと決めてるじゃないか！

そんなことより、今ある人体の機能が段階的に完成したとしたら、完成前の状態では生存できないことに何で着眼しないんだ！ブドウ糖を代謝できない時代があったらどうか？塩分がじゃじゃ漏れだった時代があった

「この世の人は「あなたは罪人です」とか「自分の罪を悔い改めなさい」などと言われたらまず大概は反撥する。日本人のばあい表面的には何気ない風でしかし内心は、「あ、宗教オタクね」と無視する人も多いだろう。」

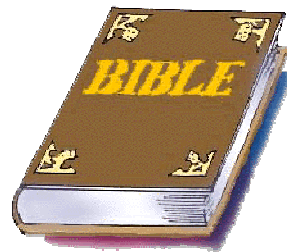
「進化なんて、そんなこと、あるわけじゃないか」

「だって学校で進化だって教わりましたよ」「新聞もＴＶも博物館も、みんな当たり前のように進化、進化、と言ってますよ」という一般人の反応から、「ですが私の遺伝子研究では・・・」「あの化石の年代を調べたところでは・・・」「断続平衡説では・・・」「などと聞いた学者たちまで皆、一様に動揺と不満を隠しきれない。爆発しそうな群衆に向かって、黒く力ある者はもう一言、言った。

「それはどれも、人間の言ったことだろう。神の書物には全く違つことが書いてあるのを、お前たち、まんざら知らなかったわけじゃないよなあ・・・」

だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。

（ブル人への手紙十・35（口語訳））



私は信じる

野口 誠（牧師）

生き物は、すべての機能が初めから整っていないならば生きられない。生き物は、進化論が唱えるような、「他の必要な器官が発生するか、しないか当てもない盲目的偶然的発生」を待つことはできない。

たとえば生き物は、それ自体の心臓を自動的に動かしている自動能の自然発生を待つことはできない。生き物は、それを生かすすべての必要な機能が初めから計画されて整っていないならば生きられない。

したがって生き物の存在は、全能なる創造者の計画に基づいて創造による以外に考えられないのである。

刑務所伝道の恵み 保坂義秀長老

「この世の人は「あなたは罪人です」とか「自分の罪を悔い改めなさい」などと言われたらまず大概は反撥する。日本人のばあい表面的には何気ない風でしかし内心は、「あ、宗教オタクね」と無視する人も多いだろう。」

「この人は救われている」とか「救われていない」とか論評はできない。その振る舞いや言葉で伺い知ることはあっても、確定的な真実として決定的に評価するなど、当然できない。

人生が終わって神さまの御前に出たとき、人はすべての生きさまに神さまの評価を受け、その後の永遠を天国か、地獄かで生きることになる。

その瞬間に、イエスさまが「この者はわたしの民です。完全な生き方や浄さではなかったとしても、わたしを信じ、わたしの思いに忠実でありたいと願って人生を全うした者です」と弁護してくださいるなら、天の御国で永遠のいのちを生かされる。死ぬ前に自分の罪の数々を悔い改め、「イエスさまの

十字架の血によってお赦し下さい」と祈るなら主の赦しの恵みを受ける。

信心深そうに振る舞って「敬虔なクリスチャンだ」とこの世の人を騙すのは簡単かもしれないが、神の目を騙すのは不可能である。人は間違つものだが、主イエス・キリスト様は、間違つたら悔い改めて生き直せとおっしゃるお方である。間違いをごまかすのも開き直るのも悔い改めではない。

刑務所伝道に神の恵みを見いだすのは、そこには「自分は罪を犯した」と知っている魂がいるからである。そして罪を赦してくださいる神への道が「イエスキリスト様を信じて悔い改めること」だと知ったなら、その魂が大転回のチャンスを含む機会となるからである。仙台刑務所ではいま四名の方が聖書通信講座を受講中。聖霊様の導きでそれぞれに変化と信仰の成長があるように祈っている。



編集後記◎秋だけなわながらいまだ異常気象が続きます。何度も襲来する大きな台風、長雨と猛暑。多くの方が日常を直撃されたこの夏。心も体も主が癒してくださることを祈ります。◎聖書をみことばによって原典から学ぶ機会を与えられ野口牧師に感謝します。難解な専門知識を噛み砕いて下さいました。 K・H記